

平林東遺跡発掘調査報告

多気郡多気町土羽所在

2008(平成20)年3月

三重県埋蔵文化財センター

序

多気町土羽は伊勢平野の南東部に広がる水田地帯です。近くを流れる外城田川は下流部一帯に肥沃な土壤をもたらしています。この地域は、古く縄文時代から人々が小高い丘などを自ら切り開いて、住まいを築いてきました。周辺からは数多くの縄文土器や石器が採集されています。次の弥生時代になると、農耕も行われるようになり、生産活動が活発になりました。近隣の笠木や森出や矢田地区でも豊かな社会が展開していたようです。こういった営みは次第に次の古墳文化を創造し、社会構造を発展させてきました。

今回報告いたしますのは、広域農道整備事業に先だって実施された平林東遺跡の発掘調査成果です。これら発掘調査で得られた貴重な資料のひとつひとつを整理し、保存に努め、広く、県内外の人々に公開することが我々の役目であると考えております。

末筆ですが、調査に協力いただいた地域の方々をはじめ関係諸機関の皆さんに厚くお礼を申し上げる次第です。

平成 20 年 3 月

三重県埋蔵文化財センター

所長 吉水 康夫

例　　言

- 1 本書は、三重県教育委員会が平成16年度に緊急発掘調査を実施した平林東遺跡の調査成果報告書である。
- 2 本調査の原因事業は平成16年度広域農道整備事業（中南勢地区）であり、発掘調査体制は以下のとおりである。

調査主体 三重県教育委員会
調査担当 三重県埋蔵文化財センター 調査研究Ⅱグループ G.L. 泉 雄二
主査 中川 明
- 3 調査委託機関 株式会社イビソク
- 4 現地調査期間は平成16年7月14日～同年9月21日である。
- 5 本書の作成業務は、執筆は中川明が調査研究Ⅰ課、情報普及課、支援研究課職員の補助を得て行い、編集は調査研究Ⅰ課の西村美幸が行った。遺物写真撮影は、調査研究Ⅰ課の長谷川哲也と山本達也が行った。
- 6 本書で報告した記録類および出土遺物については、三重県埋蔵文化財センターにて保管している。

凡　　例

<地図類>

- 1 本書で使用した地図類は、国土地理院発行の1/25,000地形図、多気町土地計画図、農村総合整備工事図（三重県農水商工部）である。
- 2 上記地図類のうち、多気町土地計画図は、国土調査法の日本測地系による座標第IV系（旧国土地標）で表現されているものであるため、平成14年4月から施工されている世界測地系・測地成果2000には対応していない。農村総合整備工事図（三重県農水商工部）については、世界測地系・測地成果2000に基づいて作製している。
- 3 採団の方針は、世界測地系・測地成果2000第VI系を基準とする座標北で示している。なお、磁北は6°30'西偏している。（平成12年、国土地理院）。

<遺構類>

- 4 土層断面図は、層の区分を実線で、調査区壁面および採録深度に相当する部分を一点鎖線で表現している。また、造構面や層位の大区分については、他の線よりも太い線で表現した。
- 5 土層断面図の色調は、小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』（第14版1994年）を用いた。
- 6 調査区位置図のうち■で示した部分は、範囲確認の調査坑である。
- 7 本書で使用した遺構表示略号は以下のとおりである。
SD：溝 SK：土坑 Pit：柱穴・小穴
- 8 調査段階で、遺構取上げとしていた遺物のうちの一部を、整理段階で包含層取上げと改めたものがある。

<遺物類>

- 9 当報告での遺物実測図類は実物の1/4縮小を基本としている。石器については、1/2縮小で表記している。
- 10 遺物実測図は、当報告書を通じて通番としている。
- 11 当報告書での用語のうち、「ぼ」は「壺」、「つき」は「杯」、「わん」は「碗」に統一している。
- 12 遺物観察表は、以下の要領で記載している。

- 番号……………出土遺物実測図掲載番号である。
実測番号……………実測段階の登録番号である。
様・質……………「須恵器」、「弥生土器」などの区分を示した。
器種など……………遺物の器種を示した。
地区……………A地区・B地区・C地区の別を示した。
グリッド……………調査時に設定したアルファベットと数字の組み合わせによるグリッド名を記した。
遺構・層名等……………遺物の出土した遺構名や層名を記した。
計測値 (cm/g)……………遺物の規格、重量等を示す。(口)は口縫部径、(底)は底部径、(頸)は頸部径、(高台)は高台部径を示す。なお、数値はそれぞれの部位の最大径であり、内法や、実測段階での接地点ではない。
調整・技法の特徴……………特徴を内面(内:)、外面(外:)で示した。調整は、基本的に各面の上から下端にかけて施されている方法を順に記した。
胎土……………小石などの混和材を除いた素地の緻密さを「密～粗」で区分した。
色調……………その遺物の内・外面の基本的な色調を記載した。カラーコードは、前掲『新版標準土色帖』に拠る。
残存度……………土器についてその部位を12分割表示とし、残存度合を示した。12/12は完存と表記した。
特記事項……………遺物の特徴となる事項を記した。
- <写真図版>
- 13 写真図版は、遺構・遺物ごとでまとめた。
 - 14 出土遺物実測図と写真図版の遺物番号は対応している。
 - 15 遺物の写真図版は縮尺不同である。

本文目次

第1章	前 言(1)
第2章	位置と環境(3)
第3章	層序と遺構(5)
第4章	遺 物(9)
第5章	周辺遺跡の採集遺物(11)
第6章	調査成果とまとめ(12)

挿図目次

第1図	調査区周辺地形図(2)
第2図	遺跡位置図(3)
第3図	調査区位置図(5)
第4図	遺構平面図(6)
第5図	土層断面図（1）(7)
第6図	土層断面図（2）(8)
第7図	出土遺物実測図(10)
第8図	周辺遺跡採集遺物実測図(11)

表 目 次

第1表	遺構一覧表(8)
第2表	平林東遺跡出土遺物観察表(12)
第3表	周辺遺跡採集遺物観察表(12)

写真図版目次

写真図版1	調査区遠景、A地区東半部(13)
写真図版2	A地区東半部、A地区全景(14)
写真図版3	S D 5、B地区西端部(15)
写真図版4	A地区西半部、A地区北側壁土層断面(16)
写真図版5	A地区北側壁土層断面（S D 14～16付近）、B地区北側壁土層断面(17)
写真図版6	平林東遺跡出土遺物（1）(18)
写真図版7	平林東遺跡出土遺物（2）(19)
写真図版8	周辺遺跡採集遺物(20)

第1章 前 言

1 調査に至る経緯

平林東遺跡は、多気郡多気町土羽に所在する遺跡で、多気町の遺跡番号は277番である。周囲には、縄文時代から古墳時代にかけての遺跡が多数分布している。

三重県農水商工部により、多気町と明和町上村地内を継貫する広域農道建設事業が計画された。この区間内には、平林東遺跡はかかる遺跡が存在するため、三重県教育委員会と埋蔵文化財センターでは、三重県農水商工部と遺跡の保存についての協議を行った。しかし、当該事業の実施は地元にとっても必要なものであったため、道路該当部分について発掘調査を行い記録保存することとなった。

これを受けて、三重県埋蔵文化財センターでは、この事業計画に関わる埋蔵文化財の有無について分佈調査を実施し、平林東遺跡では古代の土師器を探集している。また、当遺跡の周辺に所在する平林遺跡では縄文時代の石器等を、三川遺跡では縄文時代の石器片や世の土師器を探集している。その後、平成15年度に当遺跡と上村池古墳群で範囲確認調査を実施した。当遺跡では、3か所の調査坑を設定し、並列する2条の溝、土坑、小穴を確認し、土師器片が出土した。上村池古墳群では9か所の調査坑を設定したが、事業範囲は3基の古墳群には及ばないことを確認した。

今回の本調査については、記録および土工の両部門について、株式会社イビソクに現地での調査委託を行った。

2 調査経過

(1) 調査経過

調査期間は平成16年7月14日から9月21日である。今回の調査では、現地説明会は開催しなかつたが、調査期間中の9月初旬に地域住民向け調査ニュースを発行し、出土遺物についての周知と埋蔵文化財保護についての啓発をはかった。

(2) 調査日誌（抄）

8月5日 東端から表土掘削開始。頂上付近から須恵器杯、土師器高杯脚部が出土。

- 8月6日 表土掘削をA地区の17、18グリッドまで終了。
範囲確認調査坑や擾乱部分を確認。
- 8月9日 調査区北側壁を精査、基本的層序を見極める。頂部が平坦であるため、堅穴住居の検出が予想される。
- 8月10日 重機掘削完了。全体写真撮影。
- 8月11日 東端部、人力で包含層掘削23グリッドまで続行。調査区東壁土層断面図作成。
- 8月12日 調査区の外周のみ造構カードを作成。
- 8月18日 A地区の中央は緩斜面で、谷地形。土師器、須恵器壺が出土。
- 8月19日 7～14グリッド包含層掘削続行。
- 8月24日 24～27グリッド造構検出。植物の根痕が深く範囲拡大。
- 8月27日 20～27グリッド及び試掘坑No.1～3を再掘削。
各地点の層序を確認。
- 9月2日 1～5グリッドの精査。瀬戸・美濃鉄釉碗と須恵器壺出土。北側壁にトレンド掘削を実施。
- 9月6日 調査区の部分写真撮影準備。16～19グリッド造構掘削。SK6を検出。
夕方、台風対策準備を実施。
- 9月8日 造構面清掃後、調査区東端、中央、西半部の順に造構写真撮影を実施。
- 9月9日 地形、造構測量を実施。管理写真撮影を指示する。
- 9月10日 下層確認のため、トレンドチを北側壁沿いと23グリッドに設定。
- 9月13日 土層断面図の点検及び、発掘用具片付け。
- 9月14日 実測図確認。事務所撤去。
- 9月15日 16～19グリッドの谷部の下層確認。備品等撤去。現地調査終了。

3 調査の方法

今回の調査対象範囲は、大きく南に弧を描いてカーブした形であった。調査区の設定は、唯道を残して3つに分け、東側から順に東区、中区、西区と

して調査を行った。（この地区については、報告書作成時に東からA地区～C地区に変更した。）そして、各地区を通じて、世界測地系・測地成果2000の座標にのせて4m四方のメッシュ（グリッド）を設定し、調査の基本単位とした。グリッドの名称は、東西方に向に東から1～27までを、南北方向にアルファベットのA～Lまでを当てはめ、これらを組み合わせてA 1などとした。

当該地は丘陵地であり、古墳等の検出が予想されたため、調査前に電子平板を使用して地形測量を行った。表土掘削は重機で、A地区から開始した。着手に際しては、調査区中央に畦道が通過するため、十分な安全上の配慮をした。また、残土置場が周辺になかっただため、地元地権者の協力をはかり、隣地へ排出した。包含層掘削、遺構検出は、人力によつて行つた。

図面は、グリッド単位での遺構略測図は1/40、土層断面図等は1/20、全体の遺構平面図は1/20で作成した。遺構略測図、遺構平面図は、基準線を世界測地系・測地成果2000の座標にのせている。

遺構写真撮影は、丘陵上から調査区を見下ろす形で写真撮影用足場を立てて実施した。使用したフィルムはコダック E100G および100TMXである。

4 文化財保護法に関する諸通知

- ・文化財保護法に基づく三重県文化財保護条例第48条第1項（県教育長宛）
平成16年4月13日付 松農第155号
- ・文化財保護法第99条の第1項（県教育長宛）
平成16年7月14日付 教理第152号
- ・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知
(松阪警察署長宛)
平成16年10月8日付 教委第12-4-22号



第1図 調査区周辺地形図 (1:5,000)

第2章 位置と環境

1 遺跡の位置と地盤形成について

平林東遺跡（1）は、宮川の支流である外城田川下流域の低位丘陵面に位置する周知の遺跡で、多気町の遺跡番号はa277である。標高は約37mで、周辺の水田との比高差は3～5mほどである。調査区はJR参宮線の多気駅と外城田駅の中間地点にあたる。

当地域の地質を見てみると、地盤は完新世（沖積世）に完成したと考えられており、丘陵や山の多い地形は、第三紀に形成されたものとみられている。当遺跡においては、表土直下に黄褐色粘質土が堆積している。当遺跡に隣接した低位段丘面は水田に利用されている箇所が多い。

2 周辺遺跡の歴史的環境

多気町には、旧石器時代から江戸時代にかけてのさまざまな遺跡が点在する。平林東遺跡周辺でも、旧石器時代以降の生活の跡が発見されている。以下、時代順に主な遺跡と当地域の歴史を概観しておきたま。

〔旧石器・縄文・弥生時代〕

多気町内の文化の幕開けは、町内土羽の東南部から始まる。三川遺跡（2）や、当遺跡に隣接した丘陵平坦面に広がる平林遺跡（3）では、ナイフ形石器や鍛長剣片が採集されている。これらは旧石器時代後期に属するものと考えられている。三川遺跡や平林遺跡では、広域農道整備事業計画に伴って、当



第2図 遺跡位置図 (1:50,000) [国土地理院「松阪」・「国東山」1:25,000より]

センターが平成14年度に事業区域内の分布調査を実施し、サスカイト製剝片や室町時代の土師器鍋などを採集している。このことから、これらの遺跡は繩文時代以降、中世に至るまでの複合遺跡であることが明らかとなった。

縄文時代草創期の遺跡としては、半山遺跡（4）や、多気町四足田にある高皿遺跡が三重県内でも代表的な遺跡として知られている。JR多気駅の近くには、坂山遺跡（5）があり、発掘調査により縄文時代早期の煙道付土器や土坑が確認され、押型土器が出土した。調査箇所は県指定史跡となり、現在は遺跡公園となっている。平林東遺跡の南方にある森庄川浦遺跡（6）は全県下で戦後最も早く石器やサスカイト剥片の散布地として注目を浴びた遺跡で、土偶も採集されている。台地上の縁辺に位置しており立地条件にも恵まれている。近年の発掘調査により、多量の縄文土器・石器が出土し、縄文時代後晩期を中心とした時期の遺跡であったことがわかった。また、出土した叩石と磨石には赤色顔料が付着したものもあり、水耕朱生産が行われていた拠点的集落であった可能性も指摘されている。森庄川浦遺跡に隣接し、台地上に分布するのが二ツ山遺跡（7）である。中期以前と推測される縄文土器や石器も確認されている。二ツ山遺跡の600m北西には、向野遺跡（8）が所在する。ここからは、小剣頭を施した木葉形尖頭器、大型の石器などが採集されている。この他にも多気町外城田には、畠ノ田遺跡（9）と丘陵斜面に広がる与五郎谷遺跡（10）、マイラ遺跡（11）が分布する。

弥生時代の遺物としては、平林遺跡で石磐が、二ツ山遺跡では石庵丁が確認されている。このほか、東ノ谷遺跡では、壺などが採集され、当時は近くの外城田小学校に保管されていた。

【古墳時代から中世】

古墳時代の遺跡としては、町内の東南部の丘陵南麓に中尾古窯跡（12）、明気窯跡（13）がある。この丘陵には、明気古墳群（14）などいくつかの群集墳が築かれていている。また、多気郡明和町および度会郡玉城町と接する玉城丘陵は、河田古墳群（15）や斎宮池古墳群（16）などの多くの群集墳が築かれており、県下でも有数の群集墳密集場所として知られている。

一方、古代から中世全般の社会的な情勢は、文献上で窺い知ることができる。三重県の地誌である『勢陽五鉛遺響』には、多気町は「山間林叢の間より原野平田」に突き出たところに広がる場所にあり、古来自然に恵まれ、農耕が盛んであったことが記述されている。

奈良時代になると、各地で豪族が勢力を伸ばし、当時周辺地域には、竹氏、飯高氏、度会氏がそれぞれ多気郡、飯高郡、度会郡を治め、割拠していた。当地域では大鹿氏や兄国氏が勢力を振るって土地や人民を掌握していたとも伝えられている。奈良時代は特に仏教が隆盛するが、当地方においても寺院が造立された。町内西北部には、白鳳時代の牧瓦窯跡があり、奈良時代後期には皇大神宮に連絡する太神宮寺も建立される。

平安時代になると飯高氏が勢力を振るい、近長谷寺を創建した。さらに京都に所在する東寺領の大國荘や川合荘も設置された。これらの荘園については、町内西部の水田城の地名に名残を留めている。

この後莊園は、伊勢平氏の隆盛とともにその支配下に入るが、北畠氏が伊勢国司に任命されて台頭していくと、たちまち上記の寺院や田地は存亡の一途を辿っていく。

戦国時代に入ると織田信長が権力を強め、伊勢進攻を企てる。これによって、町内を治めた北畠氏も滅ぼされ、織田軍勢の支配下に入ることとなる。その他の歴史的記述は多気町史に詳しい。

【参考文献】

- ・第二編原始、第三編古代・中世『多気町史』(通史)
多気町史編纂委員会1993
- ・北村治郎「第2節地質」「明和町史」資料編第1巻
自然・考古 明和町 2004
- ・磯部 克編 三重県高等学校理科教育研究会地学部会『三重県地質図集』1987
- ・三重県埋蔵文化財センター「II. 位置と環境」「鴨ノ木遺跡（上層編）」一般国道42号松阪・多気バイパス建設地内埋蔵文化財発掘調査報告Ⅳ 1998
- ・多気町教育委員会「位置と歴史的環境」「埋蔵文化財発掘調査報告」一森庄川浦遺跡 1998
- ・三重県埋蔵文化財センター「明気窯跡群・大日山古墳群・甘利遺跡・奥漫遺跡」一般国道42号松阪・多気バイパス建設地内発掘調査報告Ⅰ 1995
- ・三重県埋蔵文化財センター「高皿遺跡発掘調査概報」1996

第3章 層序と遺構

1 基本的層序

今回の調査区は多気町土羽のJR参宮線沿いの丘陵南側縦部の緩斜面である。A地区西端付近には、丘陵上面からの谷状の落ち込みがある。

基本層序は、第Ⅰ層が腐植土混じりの黒褐色土(表土)、第Ⅱ層が灰黄褐色土(包含層)、第Ⅲ層が褐色土であり、このⅢ層上面を遺構検出面とした。

2 遺構

S K 1~4 A地区東端で確認した、長径0.4~0.7mほどの土坑である。遺物は出土していない。

S D 5 A地区中央部で確認した。「し」字状にカーブする溝である。古代の範疇に属すると考えられる土器器窯の小片が出土した。

S K 6 A地区的中央部で確認した不定形の土坑である。遺物は出土していない。

S K 8・11・12・17 A地区中央部で確認した、長径0.4~0.6mほどの土坑である。遺物は出土していない。

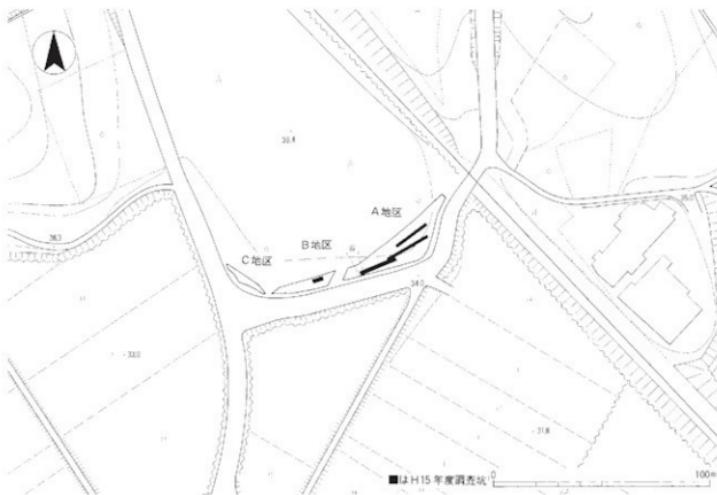
S K 9・10 A地区中央部南端で確認した、不定形の土坑である。SK 9からは、チャート製の石器剝片が出土した。

S D 13 A地区中央西寄りで確認した、断面形状がU字形の溝である。遺物は出土していない。

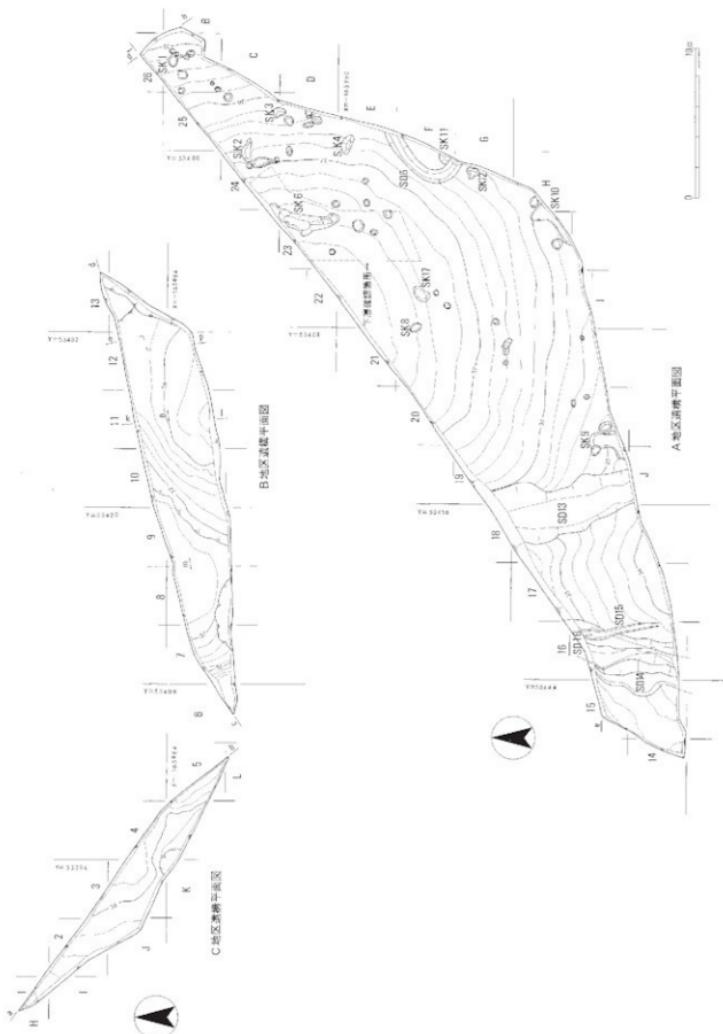
S D 14~16 A地区西端で重複して確認した。断面輪郭から、S D16→S D15→S D14の順に掘削されたと考えられる。調査区北側の、谷状の落ち込みから連続するものであろう。SD15の底から須恵器壺の体部が出土した。SD14・16からは遺物は出土していない。

3 下層遺構の確認

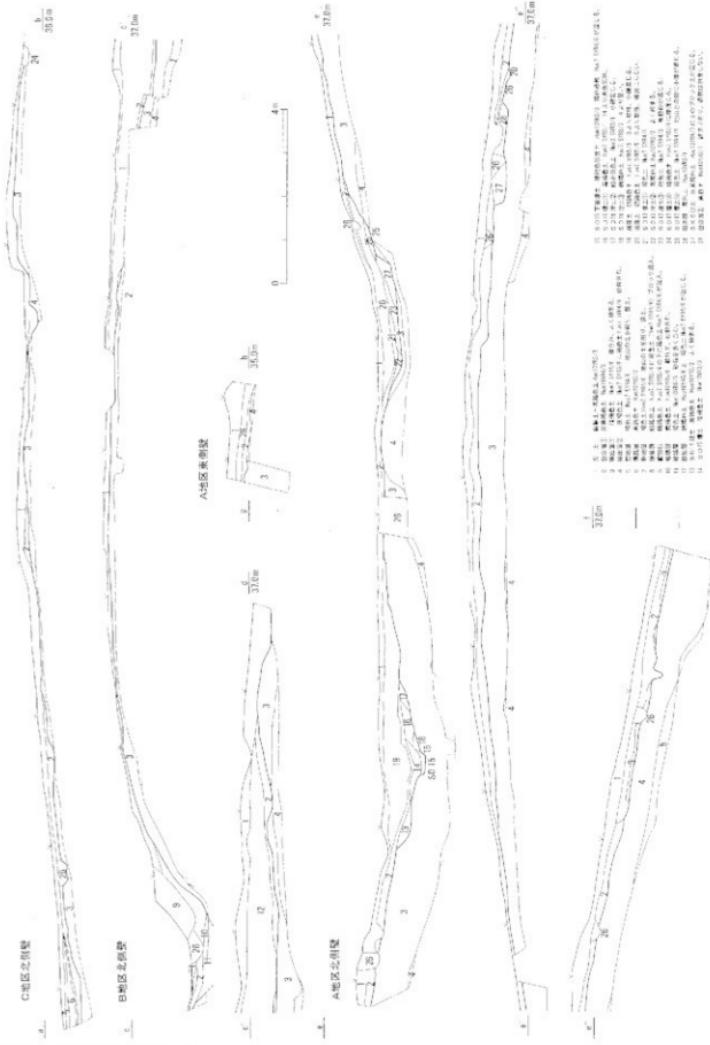
調査区全体からチャート製の石器剝片が出土した。このため、上記の調査終了後に、A地区北側壁沿い、A地区i-j断面沿い、SK 6周辺に調査溝を設定して下層の遺構の有無を確認した。しかし、いずれの調査箇所からも遺構・遺物は確認されなかった。



第3図 調査区位置図 (1:2,000)

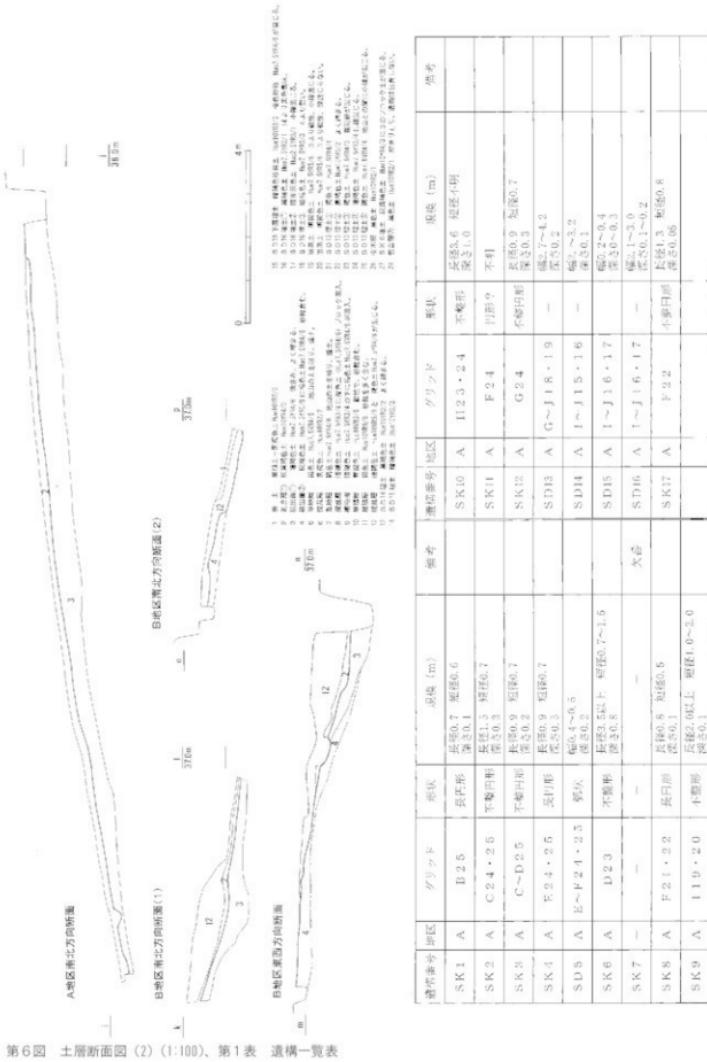


第4図 遺構平面図 (1:300)



第5図 土層断面図(1)(1:100)

第6図 土層断面図(2)(1:100)、第1表 遺構一覧表



第4章 遺 物

1 遺物出土量について

平林東遺跡の遺物総量は、コンテナパットに換算して8箱であった。遺構から出土した遺物は、小片がほとんどであった。包含層からは、弥生時代から古墳時代にかけての時期の土器を中心に、縄文時代から近世にかけての時期の遺物が出土した。

2 出土遺物について

S D15の出土遺物

1は、須恵器壺の体部破片である。遺構の中央付近で下層近くから出土した。胎土は密。同遺構から出土した他の土器は風化が顕著であったが、1については残存状態も良好である。体部の小片であるため、時期の特定が難しい。

包含層の出土遺物

2は、弥生土器壺である。外面頸部に沈線が3条施されている。弥生時代中期のものであろう。摩減も少なく良好な資料である。

3は、土師器壺である。口縁から頸部にかけて残存しているが、風化が激しい。外面頸部近くに、指オサエの痕跡が認められる。時期的には、古墳時代中期から後期初頭に位置づけられよう。

4は、土師器壺である。口径は14.4cm。口縁は「く」字状に外反し、内側直下にはやや弱く沈線が残る。時期的には、古墳時代中期から後期初頭に位置づけられよう。

5・6・7は、壺の底部残片である。いずれも、時期的には古墳時代中期から後期初頭に位置づけられよう。7は底部径が8.3cmある大型品である。底部近くに斜めの板ナデが施されている。

8は、土師器壺である。口縁近くで、横方向に開き、縄部は外反して丸みを帯びている。S字状口縁台付

壺のB類に相当する。9・10は、おなじくS字状口縁台付壺の高台部である。内面は、指オサエ後ナデられた器面は滑らかである。下端部は折り返されて丸められている。10は、大型品である。

11~14は、土師器高杯の脚部で、杯部との接合痕が認められる。11は、櫛描直線文が3条施され、その後透孔が3方向に開けられている。弥生時代後期から古墳時代前期のものである。12~14は、いずれも古墳時代中期から後期前半のものである。12は、脚部が若干開き気味である。13は、脚部全体が比較的短くやや斜め上方に引き出されて、丸みを帯びている。14の外表面はナデを施され、脚部全体が直立状を呈する。杯部との接合痕が認められる。

15は、土師器の杯であろうか。外面に、ナデ後の深い線刻文が8条認められる。

16は、須恵器脚付壺の脚部である。台部は下方に揃み上げられ、縄部は丸みを帯びる。時期的には古代の範疇に属するものであろう。

17は、陶器小碗の高台である。常滑産で、時期的には、近世初頭頃に位置づけられる。

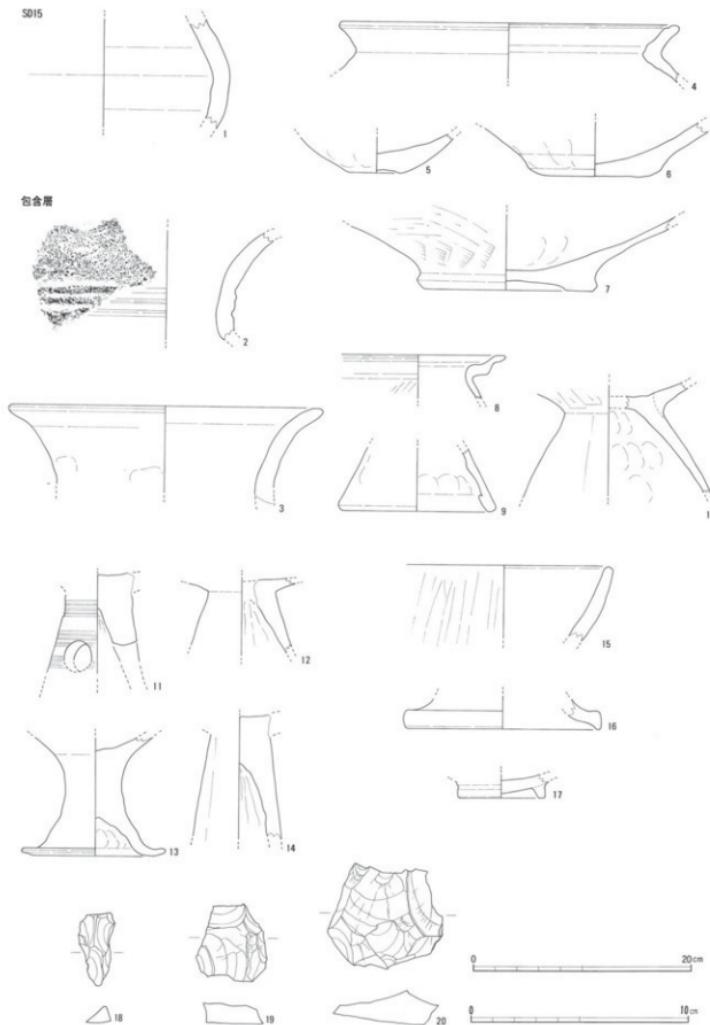
18・19・20は、チャート製の剥片である。どれもニ次剥離が明瞭に観察できる。このうち、20は、比較的大きな剥離を全周に施している。

【註】

①赤堀次郎「V考察」「細間道路」 財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1990

【参考文献】

- ・藤田憲司著「西日本の弥生土器の文様」『季刊考古学』第19号、雄山閣 1975
- ・三重県埋蔵文化財センター「鐵糸遺跡」 2006
- ・三重県教育委員会「納所遺跡—遺構と遺物—」 1980
- ・鈴木道之助著『石器入門事典』柏書房 1987



第7図 出土遺物実測図 (1:4、ただし18~20は1:2)

第5章 周辺遺跡の採集遺物

平林東遺跡の周辺にある遺跡から表面採集された資料を以下に取り上げ記述したい。

1 平林遺跡の石器について

全長は16.3cmを計る。3分の2以下には硬質な道具による研磨が施されて、先端部は刃が作られていく。また、裏面には下半に斜行の擦痕が認められ、同時にそれによる先端の折損が残る。使用中の折れであると考えられる。周辺遺跡からは、この類の鑿は1点も出土していないので、貴重な発見であったということができる。

2 煙ノ田遺跡の有舌尖頭器について

先端部が欠損しているが、『多気町史』P115に実測図が掲載されているものと同一のものである。細かい剥離痕が認められる遺物である。残存長は6.5cm、材質は灰黒チャート製の尖頭器である。基部

は先端が細く銳利で、厚みも比較的薄く、側縁にも細かな剥離が施されていて、鋭利である。

3 ニッ山遺跡の石包丁について

『多気町史』P120に写真のみ掲載されている遺物で、「多気町森庄ニツ山（小学校北）三五・三・二〇」と墨書きされている。緑泥片岩製の大型品で、正面から見て右半分は大きく欠損している。左側の穴の上に、途中まで穴を開けかけた痕跡がある。

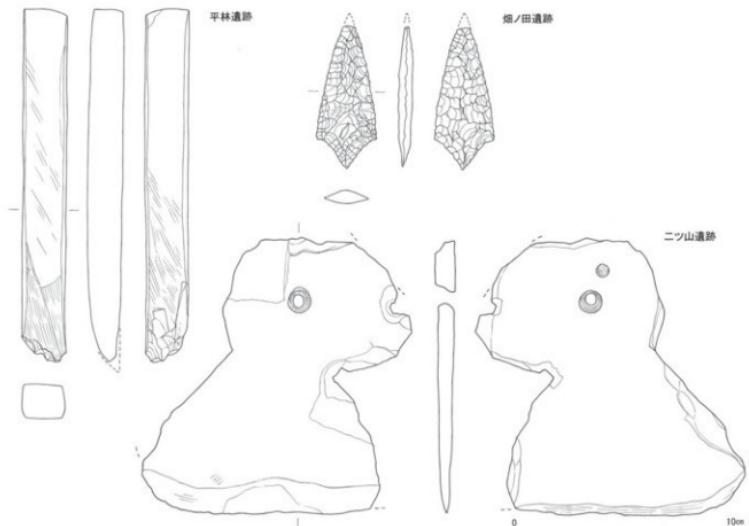
これに類似した大型石庖丁は、多気郡明和町にある北野遺跡などでも出土している。

〔註〕

①多気町「多気町史」資料編 1992

②三重県埋蔵文化財センター「北野遺跡（第2・3・4次）发掘調査報告」1995

*これらの遺物は、多気町教育委員会所蔵品である。関係各位のご厚意により当報告書への掲載を許可いただいたものである。



第8図 周辺遺跡採集遺物実測図 (1:2)

第6章 調査成果とまとめ

1 出土遺物について

今回の調査では、遺物の出土量はコンテナバットで8箱と絶対的にかなり少量であった。

包含層を含めた、当遺跡出土遺物の時期ごとの出土量をみると、弥生時代後期～古墳時代前期と、古墳時代中期～後期前半の2時期のものが主体を占める。このほかに、縄文時代のものもある可能性もあるチャート製の剥片、弥生時代中期の土器、近世の陶器も少量出土した。

2 平林東遺跡の性格について

今回の調査区は、低位丘陵の南斜面であり、調査前状況では、A地区の西端にある谷を削り込んで、

近代の生活道路が造られていた。この道路建設時にかけては存在した遺構も大きく削平された可能性がある。しかしこういった条件のなかで土坑が11基、溝が5条確認できることは大きな成果であった。

多気町土羽周辺では、坂倉遺跡や二ツ山遺跡など旧石器時代以降の人々の生活の跡が確認されている。平林東遺跡の北側の丘陵上には、旧石器時代から弥生時代にかけての多くの遺物が採集されている平林東遺跡があり、今回の平林東遺跡の調査は、これらの成果と合わせて、この地に暮らした人々の足跡を知る手がかりとなるであろう。

番号	実測番号	種・質	路線など	地区	アソート	遺物・器物名等	計測範囲(cm)	調査・目次の特徴	出土	色調	残存度	特記事項
1	002-01	陶器	土器	A	18J	SD15	—	■, ■, ○, □, △, ▽	■	内・外黄赤、外・灰赤	2, SVNR8/2 2, SVNR4/1	削一凹地
2	001-08	陶土器	土器	B	11J	現底	約6.4	■, ○, □, △, ▽	■	内・外面に凹・溝複合	10/97/11	削底丸孔, L, 2, 09
3	002-02	陶土器	土器	B	14J	現底	約14.4	■, ○, □, △, ▽	■	内・外面に褐色	2, SVNR8/6	L/32残
4	001-08	陶器	土器	B	10K	台付壺	約16.0	■, ○, □, △, ▽, □, △, ▽	■	内・外面に褐色	10/96/4	L/32残
5	002-05	陶土器	土器	A	20H	現底	約2.5	■, ○, □, △, ▽, □, △, ▽	■	内・外面に褐色	2, SVNR8/6	11/10残
6	001-05	陶土器	土器	B	10K	台付壺	約6.0	■, ○, □, △, ▽, □, △, ▽	■	内・外面に褐色	10/96/5	削底丸孔
7	002-06	陶土器	土器	A	22G	現底	約6.3	■, ○, □, △, ▽, □, △, ▽	■	内・外面に褐色	10/96/4	11/10残
8	001-07	土師器	台付壺	B	11K	台付壺	—	■, ○, □, △, ▽, □, △, ▽	■	内・外面に褐色	10/96/3	11/10残
9	001-02	土師器	台付壺	A	22P	台付壺	約7.2	■, ○, □, △, ▽, □, △, ▽	■	内・外面に褐色	2, SVNR8/6	L/32残
10	001-03	土師器	台付壺	A	21H	台付壺	—	■, ○, □, △, ▽, □, △, ▽	■	内・外面に褐色	10/96/2	削底凹部
11	002-04	陶土器	高杯	B	14B	現底(上)	約3.0	■, ○, □, △, ▽, □, △, ▽	■	内・外面に褐色	SVNR8/6	削上半周削
12	002-07	土師器	高杯	A	22H	現底	—	■, ○, □, △, ▽, □, △, ▽	■	内・外面に褐色	2, SVNR8/6	削底合削
13	001-09	土師器	高杯	A	23G	土器	約6.6	■, ○, □, △, ▽, □, △, ▽	■	内・外面に褐色	2, SVNR8/6	L/32残
14	001-01	土師器	高杯	A	20C	台付壺	約6.7	■, ○, □, △, ▽, □, △, ▽	■	内・外面に凹・溝複合	10/96/4	H-底基部削
15	001-04	陶土器	杯	C	6L	台付壺	—	■, ○, □, △, ▽, □, △, ▽	■	内・外面に褐色	2, SVNR8/6	11/10残
16	002-08	陶土器	高杯	A	20B	現底(上)	約6.0	■, ○, □, △, ▽, □, △, ▽	■	内・外面に褐色	SVNR8/2	L/32残
17	002-03	陶片	十柄	A	4K	現底(上)	約4.0	■, ○, □, △, ▽, □, △, ▽	■	内・外面に凹・溝複合	10/97/3	6-/12残
18	003-03	陶片	調査用台付壺	B	11K	台付壺	約2.7	■, ○, □, △, ▽, □, △, ▽	—	灰マット	—	—
19	002-05	陶片	調査用台付壺	A	22D	台付壺	約2.8	■, ○, □, △, ▽, □, △, ▽	—	灰マット	—	—
20	003-02	陶片	調査用台付壺	B	11K	台付壺	約2.8	■, ○, □, △, ▽, □, △, ▽	—	灰マット	—	—
21	003-03	陶片	調査用台付壺	B	11K	台付壺	約2.8	■, ○, □, △, ▽, □, △, ▽	—	灰マット	—	—

第2表 平林東遺跡出土遺物観察表

番号	実測番号	種・質	路線など	遺跡名	遺物・器物名等	計測範囲(cm)	調査・目次の特徴	材質	色調	残存度	特記事項
1	001-01	磨製石器	石器	平林遺跡	表層	約10.4	■, ○, □, △, ▽, □, △, ▽	粘板岩	灰黄色	先端一部欠	使用痕跡あり
2	001-03	G器	有蓋尖底器	坂下遺跡	表層	約6.5 縦2.8 横0.7	■, ○, □, △, ▽, □, △, ▽	陶質・粘土質 壁面剥離・表面火照	暗灰色	先端折損	
3	001-02	G器	有蓋尖底器	二ツ山遺跡	表層	約12.2 縦12.4 横0.8	■, ○, □, △, ▽, □, △, ▽	上半・2孔	暗灰色	先端折損	

第3表 周辺遺跡採集遺物観察表



調査区遠景（調査前）



A地区東半部（東から）

写真図版 2



A地区東半部（西から）



A地区全景（西から）



SD 5 (北西から)



B地区西端部（東から）

写真図版 4



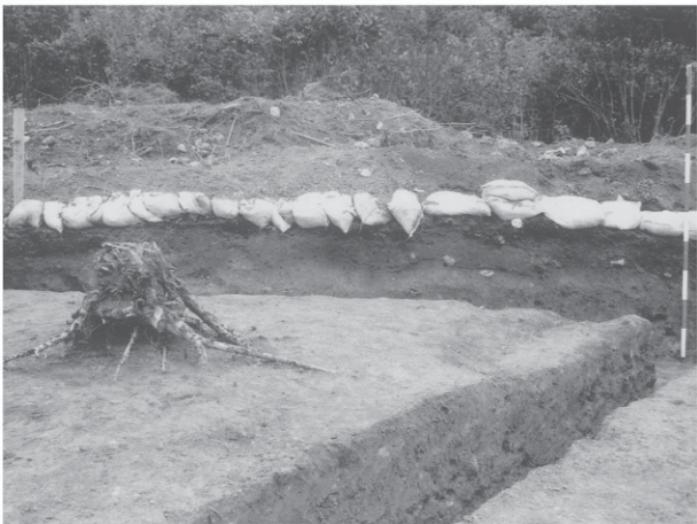
A地区西半部（西から）



A地区北側壁土層断面（南から）

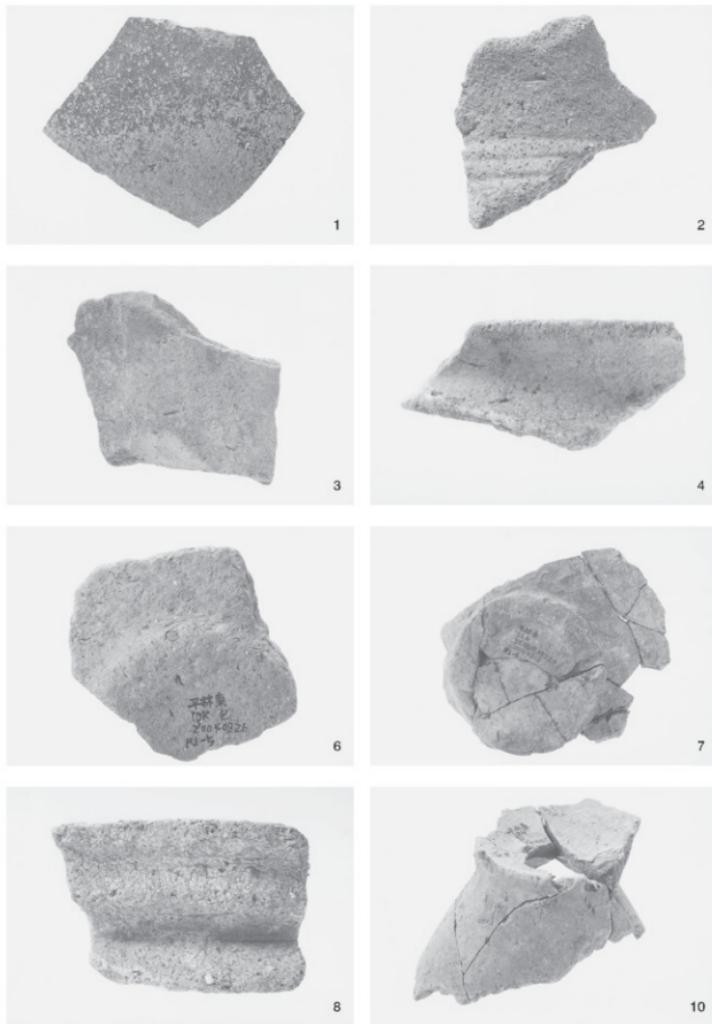


A地区北側壁土層断面（S D14～16付近）（南東から）



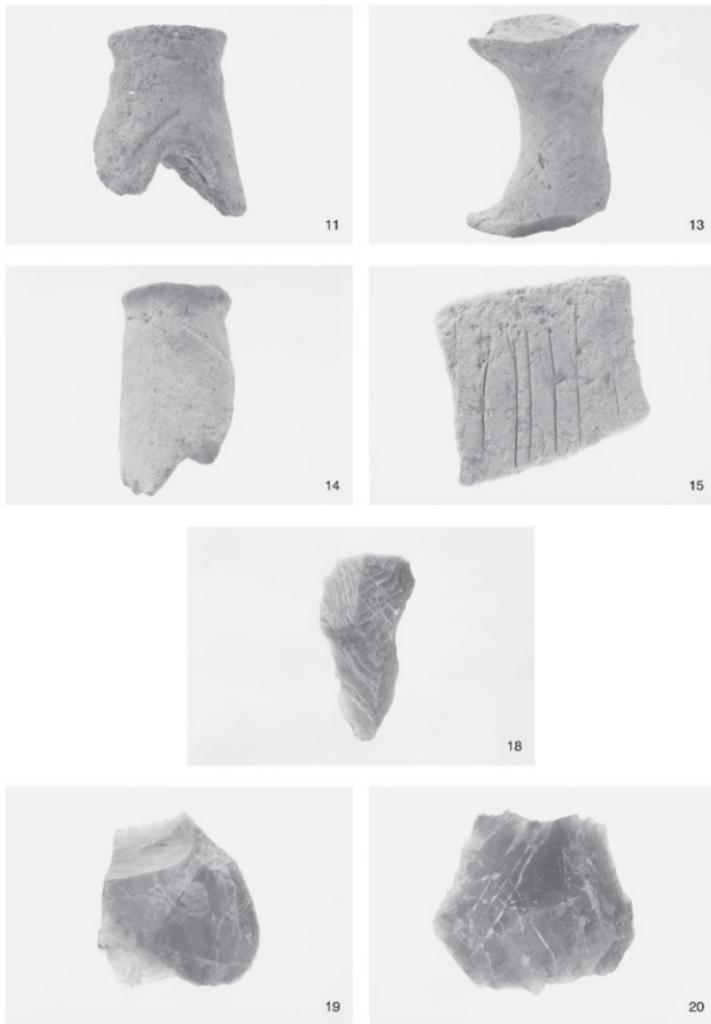
B地区北側壁土層断面（南から）

写真図版 6



平林東遺跡出土遺物（1）

写真図版 7



平林東遺跡出土遺物（2）

写真図版 8



烟ノ田遺跡



(正面)



平林遺跡



(表)



(裏)

周辺遺跡採集遺物

報告書抄録

三重県埋蔵文化財調査報告298

平林東遺跡発掘調査報告

多気郡多気町土羽所在

2008（平成20）年3月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター
印 刷 株式会社アイブレーン